第35回 全国女性のつどい in 沖縄
なまやさ！命どぅ宝
～今こそ考えるとき Life & Peace～

1日目

6月25日から26日の二日間にわたり、第三五回目の全国女性のつどいとして、「女性のつどいin沖縄」が開催された。沖縄での大会はおよそ二〇年ぶりだ。

会場となった沖縄県男女参画センター「てぃるる」には、各都道府県からおよそ一〇〇人が集まっていただいた。はじめに開会式を行い、民放労連本部執行委員や「女性のつどいin沖縄」実行委員らの挨拶に耳を傾けた。

その後の基調講演では、ジャーナリストで映画監督の三上智恵さんが沖縄におけるアメリカ軍基地の現状について説明し、緻密な取材に裏打ちされた講演内容に、メモを取りながら真剣な眼差しで話に聞き入る参加者の姿も見られた。この中で三上さんは「軍隊は住民を守らないというのが沖縄戦の教えである」と語り、集団的自衛権の行使が容認された安全保障関連法について警鐘をならした。また、宮古島や石垣島に自衛隊が配備されようとしていることについても触れ、「先島への自衛隊配備は中国にとっては大きな圧力ととらえられる可能性がある」として配備計画についても日頃から注視する必要性を強調した。

三上智恵さんによる基調講演

交流会で集合！

2日目

全体会二日目は朝9時に開会し、一日目の全体会や分科会、交流会を踏まえたアピール文が採択された。

アピール文は沖縄の戦争体験を踏まえたものであり、沖縄が今なお米軍基地と隣あわせの生活を強いられていて、基地から派生する事件・事故が後を絶たないことや、先日元米海兵隊員で軍属の男が女性を暴行し殺害する痛ましい事件が発生し、多くの人々が怒りと悲しみに包まれたことも盛り込まれた。こうした事件の元凶は「基地」という構造的暴力がもたらすもので、女性は命を育む観点からも、そうした現状は看過できないとして、全国の民放で働く仲間と平和な世の中を作り上げていくことを再確認した。

また、沖縄からの緊急報告として、米軍属事件に対する抗議の声も紹介され、次回沖縄で女性のつどいが開かれる時には、こうした米軍関係の課題ではなく、子育てや教育、介護など生活に重点を置いた話し合いができるようにしたいとの思いも発信された。

分科会①

「NO」の言える力 ～大事な人を守るために必要なこと～
講師　高里鈴代さん

分科会①の講師は、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表をつとめる高里鈴代さんでした。

講演では、沖縄に基地が集中する現状や、米兵による性犯罪の変遷を生々しい実体験の声を紹介しながら説明しました。高里さんは、犯罪が繰り返される背景には、日米地位協定の不条理さがあることを指摘すると同時に、報告されている被害は氷山の一角で、事件を公にすることで世間から被害者がバッシングをあびるという風潮が、被害者に沈黙を強いていると訴えました。

講演終了後、参加者からは旧日本軍の従軍慰安婦問題に対する考えを問う質問が挙がり、高里さんは、「慰安婦として働いた人を戦後も差別化する社会の風潮があった」ことを問題視すると同時に、「当時、慰安所に通った若い兵士も、過酷な状況下で人間性をコントロールされた、ある意味で被害者だった」と指摘しました。最後に、高里さんは「慰安婦問題も含め、女性への性暴力を構造化する軍隊の仕組みについて、抗議の声を上げ続けなければならない」という決意と共に講演を締めくくりました。

分科会②

沖縄の食に学ぶ ～働く女性に優しい料理教室～
講師　徳元佳代子さん

分科会②は、「沖縄の食に学ぶ～働く女性に優しい料理教室～」と題して、ベジフルマンマ代表、シニア野菜ソムリエの徳元佳代子さんを講師に招いた料理教室が開かれました。

この中で、沖縄の食材が紹介され、予防医学の観点から最適な食べ方が提案されました。徳元さんは農家に嫁いだことがきっかけで作物を育てることに興味を抱き、病と闘いながらシニア野菜ソムリエの資格を取得しました。

命と向き合ってきた徳元さんだからこそのハートフルな料理教室に、参加者も得るものが多かったようです。徳元さんは分科会後の交流会でも挨拶し、心をつかむ語り口に大会参加者からは多くの拍手が送られていました。

分科会③

地域の発信力を信じる ～マスコミから人材育成の現場まで～
講師　開梨香さん

分科会③は、県内で活躍する名プロデューサー開梨香さんが講演しました。

開さんは、沖縄県出身で、琉球大学在学中から琉球放送でADとして仕事をはじめ、その後インテリア会社や大手ディスプレイ会社の現地法人代表として県内主要リゾート施設、商業施設、文化施設の内装・展示を統括した経験があります。また、沖縄サミット開催時には、小中学生サミットなど三つのプレイベント運営にも携わり、子供達を主体にした催しもプロデュースするなど多方面で活躍しています。

分化会ではそうしたビジネス経験を踏まえた地域を活性化させるアプローチの仕方などが紹介され、力強さと美しさを兼ね備えた開さんの話に参加者はひきこまれていました。

分科会④

この国の「戦争を許さない」の最前線は、今、辺野古にある
講師　三上智恵さん

基調講演を聞いて、ぜひ分科会も参加したいという方もおり、急きょ座席を増やして対応しました。映画監督として、民主主義の最前線と言われる辺野古や高江で、どういう姿勢で撮影に臨んでいるのか、その期待に包まれました。

冒頭は、今まさに政府により新基地建設が強行されようとしている辺野古の大浦湾のサンゴの様子から。なぜ辺野古に基地を造るべきでないのか言わずもがなというほどの美しさにしばし言葉を失うほどでした。三上さんは、今でこそ「辺野古」が取り上げられるものの、2004年から始まった、基地誘致の攻防や座り込みを続ける市民らの思いを、サンゴやジュゴンから全国に伝えて関心を持ってもらおうとしてきたことを話しました。

そして映画の話に。『戦場ぬ止み』という映画のタイトルは辺野古のテントに寄せられた一句の琉歌より譲り受けたものであること。2014年11月に知事選がありそこで戦を止め、沖縄の平和への思いを世界中に訴えようと歌われたものからもらったと明かしました。なぜ、座り込みを続けるのか。無駄ではないのか。辺野古の歴史を語る中で、「一日でも止めたいという思い」を一〇年以上に渡り取材を続けた三上さんから市民の思いが代弁されました。

最後に、三上さんは「なぜテレビから映画を選んだのか」という問いに対して静かにこう語りました。「一分や四分、テレビには決められた枠があり、伝えられない思いがある。二〇年近くドキュメンタリーもたくさん作ったけれど、全国ネットになったものは一つもなかった。なので映画しかなかった」と。放送局で働く私たちにとっては胸が苦しくなるお話でした。が、基調講演に続く分科会での、女性として、放送ウーマンとして、映画監督として、常にパワフルな三上さんの姿は全国の女性にとって本当に刺激的で、あすへの活力になりました。

バスツアー

辺野古コース／南部平和コース

★辺野古バスツアー

「初めて辺野古に行く」という参加者たちにとって、今回は、実際に自分の足で歩き、座り込み参加者たちの思いに耳を傾け、そして現場で考えることが出来たという点で「報道人の原点」のようなツアーになったと思います。

生憎の悪天候でしたが、辺野古の浜にいた時、一瞬差し込んだ太陽を浴びて海がキラキラと輝き始めた時には、参加者たちも立ち止まって海を見つめていたのが印象的でした。また、座り込みテントでは、戦争体験者の70代女性が「絶対に辺野古に基地は造らせない」と強く語ってくれました。その話を聞いて「涙が出そうだった」と話した参加者もいました。

移動中の車内では、参加者一人一人に辺野古で感じたことを語ってもらいました。その多くは「地元に帰ってからも考え続けたい」「職場の人たちにも伝えたい」といった積極的な意見でした。一方で、「沖縄から米軍基地がなくなったら経済的に困る人がいるのではないか？」「最終的に基地をどうしてほしいの？」などと言った声を聞くと「まだまだ沖縄のことは本土に伝わっていないなぁ」とも感じました。

今回のように先輩に話をさせてもらえたことは大変勉強になりました。話しながらも自分の未熟さを痛感し、「もっともっと勉強しないと！取材に行かないと！」とやる気になりました。沖縄の人々の思いを伝える、この報道という仕事の責任を改めて感じた一日でした。

ひめゆりの塔

キャンプシュワブ前テント

★南部平和バスツアー

南部戦跡をめぐるバスツアーでは、ひめゆり平和祈念資料館を訪ね、御年90歳を超えた戦争体験者から貴重な戦争体験を直接聞く機会に恵まれました。参加者からは「今は平和だと思いますか」「戦争当時はどのような心境でしたか」など質問が寄せられ、一人一人から悲惨な戦争体験をそれぞれの地域でも受け継いでいこうという気持ちがあふれていました。

昼食は資料館に隣接する食堂で沖縄そばやタコライスを食し、休憩タイムを挟んで平和の礎へと移動しました。ここでは、自由に散策したり、平和祈念資料館を見学したりするなどして各々が平和について考えました。空港へと向かうバスでは、参加者が感想を述べる時間も設けられ、おのおのが平和の尊さを実感したようでした。

実行委員会から

ストレスフルな一年だった。集いを開催するにあたり、少ない人数で大会を成功させないといけないというプレッシャーに負けそうになりながら準備を進め、皆で力を合わせてなんとか無事に終了できた。大会開催にこぎつけたのは女性協本部の皆様をはじめ、多くの方々のご協力があったから。

この場を借りて重ねて感謝申し上げます。誠にありがとうございました。来年の関西大会実行委員のみなさまには体に気を付けて頂きたい。